

私立大学研究ブランディング事業 令和元年度の進捗状況

学校法人番号	341011	学校法人名	広島文化学園		
大学名	広島文化学園大学				
事業名	地域共生のための対人援助システムの構築と効果に関する検証				
申請タイプ	タイプA	支援期間	5年	収容定員	1526人
参画組織	広島文化学園HBG対人援助研究センター、看護学部・看護学研究所、学芸学部・教育学研究科、社会情報学部・社会情報研究科、人間健康学部				
事業概要	支援を必要とする子ども、障害児・者、高齢者・認知症者が健康に暮らす共生社会の実現のために、HBG対人援助研究センターを核として、集いの場となる「来んさいカフェ」を提供する。看護・医療福祉、スポーツ・健康福祉、子ども子育て・教育福祉の3研究部門から、「カフェ」における対人援助プログラムと持続可能な地域支援サポーター養成プログラムの開発と検証を行い、本事業が地域の活性化に結びつくことを実証する。				
①事業目的	<p>平成27年度の国勢調査によれば、我が国の高齢化率は26.7%であり、平成47年に33.4%になると推計されている。超高齢社会と少子化が同時に進行することへの対応は、わが国の最重要課題の一つである。本学のキャンパスがある呉市(人口23万人)、広島市安佐南区(人口24万人)の高齢化率は、呉市32.6%、広島市安佐南区19.5%であり、15歳未満児童の割合は、呉市11.5%、広島市安佐南区20.0%であり、地域により人口構成の特徴が異なり、地域のニーズに違いがある。</p> <p>乳幼児から高齢者、障害のあるなしにかかわらずすべての人々が健康に暮らす共生社会を実現し、自治体の掲げる「地域共生、ふれあいの安心まちづくり」を目指し、地域の生活課題を住民が主体となって解決する」活動に参画し地域活性化に資するために、HBG対人援助研究センターを核として、以下の4つの研究を実施する。</p> <p>(1)看護・医療福祉研究部門では、高齢・認知症者の健康維持・増進、生きがい、日常生活動作の維持・改善を図るために、「来んさいカフェ：呉」におけるHBG看護カフェプログラムを開発し、その支援の有効性について研究・検証する。特に、これまで看護・医療と福祉の分野で個別に行われてきた分野を有機的・総合的に関連づけた総合医療福祉の観点から支援の有効性を研究・検証する。(2)スポーツ・健康福祉研究部門では、障害の有無にかかわらず、子どもから高齢者まで身体活動能力が異なる人たちが共に運動やスポーツを行うインクルーシブ・スポーツを実践する「来んさいカフェ：坂」におけるHBG健康アダプテッドプログラムを開発し、その支援の有効性について研究・検証する。(3)子ども子育て・教育福祉研究部門では、「来んさいカフェ：広島」における障害のある子どもや障害児子育て支援に関わっている人々の課題や問題の解決のために人間の原感覚に働きかけるHBG子育て支援プログラムを開発し、その支援の有効性について研究・検証する。(4)さらに、すべての部門の「来んさいカフェ」において、困難を抱える人を支援する人(施設職員、介護をする人、中学生や高校生)のための地域支援サポーター養成プログラムの開発と検証を行う。</p>				
②令和元年度の実施目標及び実施計画	<p>3研究部門における「来んさいカフェ」において支援プログラム及び支援サポーター養成プログラムの効果を測定し、その結果を基にプログラムを修正し、精緻化し支援プログラム及び支援サポーター養成プログラムを再編成する。看護・医療福祉研究部門では、医療福祉ソーシャルワーク視点に基づく支援が高齢・認知症者のどのQOLの改善に効果的であったかを明らかにし、プログラムの精緻化を図り、提案する。スポーツ・健康福祉研究部門では、前年度までの結果を基に、障がい者及び高齢者の健康に関連するQOL(HRQOL)向上支援のための修正したインクルーシブ・スポーツプログラムを提案する。提案したインクルーシブ・スポーツプログラムを実践し、その有効性をHRQOLの観点から検証し、検証結果から、インクルーシブ・スポーツプログラムを精緻化する。子ども子育て・教育福祉研究部門では、スノーズレン体験後の心理及び生理的変化と支援内容・体験内容との関連を明らかにし、支援プログラムの修正と精緻化を図る。いずれの研究部門においても、「地域の対人支援のためのスタンダード」化したプログラムを作成する。</p> <p>すべての部門において、地域支援サポーターへの助言とケアを実施し、また、聞き取り調査やアンケート調査、観察、生理指標の測定を実施する。受講者の受講後の活動を調査、ヒアリングを実施する。さらに、発達に応じた支援プログラム、音楽サポーター養成プログラムを統合し、洗練された支援サポーター養成プログラムを試行する。</p>				
③令和元年度の事業成果	<p>文部科学省選定の研究ブランディング事業は最終年度を迎えた。広島文化学園HBG対人援助研究センターを核として、看護・医療福祉研究部門、スポーツ・健康福祉研究部門、子ども子育て・教育福祉研究部門では、研究ブランディング事業の目標である地域連携・地域貢献のための対人援助プログラムと対人援助サポーター養成プログラムの作成、来んさいカフェの活動などの教育研究活動を推進し、地域に活動内容を研究成果を発信し、「対人援助」をキーワードとするブランド化を進めてきた。</p> <p>【対人援助研究センターの取組】ア 前年度研究ブランディングの進捗状況(文部科学省指定)をホームページで公表した。イ 対人援助研究センター推進会議を年8回、3研究部門の研究推進会議を延べ21回開催し、研究活動を推進することができた。ウ SKY HEART代表 吉永由紀子氏を招聘し、「対人援助 ～想う心～ALL FOR YOUで育む笑顔の輪」をテーマに講演会を、すべてのキャンパスの学部学科を対象として実施し、対人援助職を目指す学生にとって、満足度が高く有意義な会となった。エ 学生の成長を可視化するためのPROG(リテラシーとコンピテンシーを測定)を実施し、石川純一氏(リアセック)を招聘し、学生への振り返り授業を行うなど学生が自身の強みと弱みを知ることができた。オ 3研究部門で、目標であった地域連携・地域貢献のための対人援助プログラムや対人援助サポーター養成プログラムを作成することができた。カ 教育の質向上プロジェクトとして、今年度新たに学生の学修成果の可視化のための学修履歴証明書を作成し、大学3・4年生の学生に対して発行することができた。</p> <p>【各研究部門の取り組み状況】<看護・医療福祉研究部門>ア 認知症者や高齢者を対象とした認知症カフェ「あがりんさい」を12回、高齢者カフェを4回実施するとともに、地域の方や学生のサポーターを対象とした認知症サポーター養成講座を5回、認知症サポーターフォローアップ研修を1回行った。呉地域におけるネットワーク会議を1回、公開講座を3回開催するなど地域に定着した取り組みとなった。イ 高齢者・認知症カフェにおけるサポーター養成プログラムを開発し、出張カフェ・学内カフェにおける縦断的な健康調査の実施と効果的な活動(エクササイズ)の提案やその効果法について検証できた。研究成果を国内学術雑誌に1編投稿し、学会発表を10回行うことができた。</p> <p><スポーツ・健康福祉研究部門>ア 重度・重複障害児を対象として、アダプテッド・スポーツ教室を広島市心身障害者スポーツセンター、高知県障害者スポーツセンター、山口ウッドムーンネットワーク、県立山口大学、坂キャンパス、郷原キャンパスにおいて22回開催することができた。イ スポーツ教室として、「HBGテニス教室」を年3回(参加者は延べ120名)、「健康寿命を延ばす体操教室」を、呉地域において年3回(参加者は延べ41名)、及び「ダンスワークショップ」(参加者は19名)を1回開催し、地域に根差した取り組みを行った。</p>				

<p>③令和元年度の事業成果</p>	<p><子ども子育て・教育福祉研究部門>ア 発達障害支援とスヌーズレン研究に係る客員研究員を配置して、障害児の支援、スヌーズレンによる痛み緩和に関する生理心理学的研究を推進することができた。イ 研究成果を海外の学術雑誌に1編、国内の学術雑誌に1編、学内の紀要論文に5編掲載し、国際学会で1回発表することができた。ウ ペアレントトレーニングを行う“ぶんぶん親子教室”を8回開催し、地域で悩みを抱える親の不安を解消するための支援ができた。エ 関西大学文学部 教授 寺崎真志氏を招聘し、講演会「ハイリー・センシティブ・チャイルド」を開催し、地域の発達障害支援に係るサポーターの養成の一助とすることができた。</p> <p>【広報の促進】ア 対人援助研究センターのホームページに本事業の研究成果や来んさいカフェの実施状況並びに研修会情報などを逐次更新し、教育研究活動全般にわたって学内外に発信できた。イ 前年度の報告書を作成し、中四国の私立大学、全国の研究ブランディング事業選定校、関係機関・者等に送付し、研究成果について広報を行うことができた。ウ 対人援助をテーマとした大学ブランドロゴを活用した新たなクリアファイルを作成し、全学生に配布したことにより、対人援助について学生の理解が深まった。</p> <p>【関係機関との連携】ア 呉市との連絡会議を年2回実施し、また、看護・医療福祉研究部門とスポーツ・健康福祉研究部門では、行政機関からの具体的な行事への参加要請や依頼に応える形での連携協議を進めることができた。子ども子育て・教育福祉研究部門では、地方独立行政法人広島市立病院機構広島市民病院小児科及び社会福祉法人広島県リハビリテーション協会ときわ呉との連携を強化できた。</p>
<p>④令和元年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>【自己点検・評価】 本研究ブランディング事業は、学園の使命の一つである対人援助をテーマとして多くの事業を展開してきた。4年間の取組を通して、対人援助職を育成する大学としての目指すべき方向性が明確になり、全教職員・学生共に「対人援助」を本学のブランドとして認識できるようになってきた。</p> <p>ア 対人援助職を目指す学生の教育の質を保証するためのPROGを実施し、教育の質向上プロジェクトとして、学修履歴証明書を書き進め、対人援助職を目指す学生に発行できるようにした。イ 前年度の教育研究活動の取組に対する外部評価委員会（5名）から、概ね肯定的評価を受けたが、委員会からの指摘に沿って事業を展開した。ウ 令和元年5月に、前年度の活動と共に評価内容を報告書にまとめ、概要をホームページに掲載した。エ 対人援助研究センターとして3研究部門の活動をとらえて積み上げてきた教育研究活動の成果は、引き続き、対人援助プログラムや対人援助サポーター養成プログラムとして地域に提供するとともに、「来んさいカフェ」を開催する等、地域連携、地域貢献を展開していく。</p> <p>【外部評価】 <事業推進体制等について>ア 4年間の研究ブランディング事業の最終年度においても、対人援助研究センターを中心とした3研究部門の連携により、ブランド力の向上を図るための体制を構築し、3研究部門がそれぞれの特性を活かしたプロジェクトを展開し、研究成果発表会や講演会の開催だけでなく、対人援助プログラムやサポーター養成プログラムを開発したことは高く評価できる。イ 地域の行政機関などとのつながりも強くなり、大学を越えた推進体制が確立され、共生社会実現に効果的なプログラム開発の取組は高く評価される。ウ 大学全体で組織的、かつ、計画的に推進し、地域の方々の豊かな生活やQOL向上の取組を行うとともに、地域に根差した教育機関として高く評価される。エ 社会福祉分野全般をカバーできる体制が確立されてきている。</p> <p><調査・研究の活動等について>ア 支援プログラム研究のみならず、支援サポーター養成にも力を注いでおり、事業内容が大きく発展している。とりわけ、実践研究の積み上げにより蓄積した多くのデータ等を基に、より信頼性の高い有効な所見を導き、高い汎用性をもつプログラムを目指した精緻化及びその検証を積極的に行っており、実装化に向けた活動として高く評価できる。イ 「対人援助」をキーワードに3研究部門の特色を活かしたテーマについて、整合性のある調査研究が行われている。ウ 地域と連携した事業の開催、学会・専門誌への研究成果・論文発表が活発に行われ、研究活動・研究成果を広く地域社会及び学会に公表する積極的な姿勢が示されている。エ 支援サポーター養成プログラムに参加した学生の高齢者に対する意識や心理的抵抗感の軽減化などを明らかにするとともに、アウトリーチとして展開するためにパッケージ化を図るなど、ブランドイメージを強化に取り組んでいる。オ 本研究ブランディング事業が学生にどのような影響を及ぼしたかをコンピテンシーとリテラシー（PROG）により測定するなどの取組は、学修成果の可視化の観点から画期的である。カ PROGの結果を学生にフィードバックし、学修履歴証明書として発行することは学生の動機づけを高めるという点でも大変高く評価できる。</p> <p><課題と改善点について>ア 学生が就職や就職活動を行うにあたって、活動に参加したことがプラスになったことなどの情報を収集し、活動内容の改善に役立てることも必要である。イ 調査尺度の信頼性・妥当性の課題は事業開始時よりも改善され、成果の一般化・普遍化が可能になったが、対象者の数、調査期間、研究デザインの不透明なものもみられる。今後、縦断的研究や長期にわたり調査・研究を継続することが大切である。ウ 学生に対する支援サポーター養成プログラムの充実が求められる。支援サポーターとして関わる学生の認知・意識・行動を捉え、変容や成長をフィードバックする体制構築が必要である。エ 研究部門で創出された支援プログラムに汎用性がありかつ実装プログラムとするには、4年間では短かすぎた。今後、精緻化研究を継続し共生社会に対応できる対人援助プログラムの改善を図ることが必要である。</p> <p><特記すべき事項について>ア 教員による支援活動や研究活動にとどまらず、対人援助プログラムの有効性を基にしたスタンダード化されたプログラムの作成、また、サポーター養成プログラムの作成のように、将来につながる活動も進んでおり高く評価できる。イ 様々な興味・関心を持った世代の異なる住民が集える「来んさいカフェ」を設置し、そこを中心にコミュニティづくりを目指す本事業の展開は素晴らしい。ウ 「来んさいカフェ」に来られない人に対する訪問支援も評価できる。エ 学生が直接かかわるので、卒業後の人材育成や地域との連携強化などにも貢献できる有意義な取り組みである。オ 学修履歴証明書の発行は、活用に様々な可能性があり、興味深い。カ 記念講演の内容は、対人援助職を目指す学生にとって、対人援助職の職業人として生きる上での基本となる『相手を「想う心」やFor Youの精神で一瞬のチャンスに一步を踏み出す勇気もてる人になること』の大切さを実感させる良い機会となった。キ 4年間にわたり地域の活性化に大きく貢献した。特に呉市での認知症カフェにおけるスキルの高い学生の支援は、地域の多くの高齢者に喜ばれ、認められていることが行政として評価している。</p> <p><総評>ア 年を追うごとに事業内容が益々発展しており、地域になくはならない大学、また、地元とともに歩む大学というイメージが定着してきたことがうかがえる。学内的にも研究活動の活性化のみならず、学生への好ましい効果もうかがえる。イ 対人援助プログラムや対人援助サポーター養成プログラムを地域に提供したことで地域との連携が深まり、学生もキャリア形成や就職などで幅広く活用できる可能性が広がり、対人援助職のエキスパートを養成するため大学としての発展が今後も期待できる。ウ 本事業では、従来型の「来んさいカフェ」の運営に加え、来場しない、来場できない住民にも配慮している点が特筆すべきことである。エ 活動量、筋肉量や水分量を把握できる体組成、骨密度、唾液中のBDNFなどの生理学的変数を指標とした効果的な介護予防活動の方法論が明らかにされてきた点は高く評価できる。オ 対人援助職を目指す学生を主体にした教育研究活動の取組が貴学のブランド力を高めており、今後、地域社会や関係自治体と連携した持続可能で発展的な活動を展開することを期待している。カ 高齢者のフレイル防止が大きな問題となっている中で、「来んさいカフェ」の活動は、集いの場としての効果も高く、フレイル防止に有効な事業である。また、対人援助サポーター養成プログラムを支援プログラムと同時に研究・開発したことは、持続可能な取り組みとして地域に根付いていくことを目指しており高く評価できる。</p>
<p>⑤令和元年度の補助金の使用状況</p>	<p>ア 講演会講師謝金・旅費 イ 外部評価委員謝金・旅費 ウ リーフレット・報告書作成費 エ ホームページ維持費 オ 補助員人件費 カ 学生PROGの実施費 キ 学修履歴証明書作成システム運用費等 ク 公開講座実施のための謝金・旅費・広報印刷代等 ケ Nシステム（健康管理システム）の委託費 コ カフェ開催用検査費用等 サ 臨床心理士雇用費 シ 対人援助研究センター・来んさいカフェ運営費用</p>